

ウメのタマカタカイガラムシの防除方法

1 はじめに

タマカタカイガラムシはウメなどのバラ科樹木に集団で寄生して加害し、多発すると枝を枯死させる新たな害虫です(写真1)。本県のウメ園ではおよそ10年前から発生が認められ、被害が拡大しています。

ウメ樹におけるタマカタカイガラムシの効果的な防除方法を明らかにしたので、紹介します。



写真1 タマカタカイガラムシ（成虫）

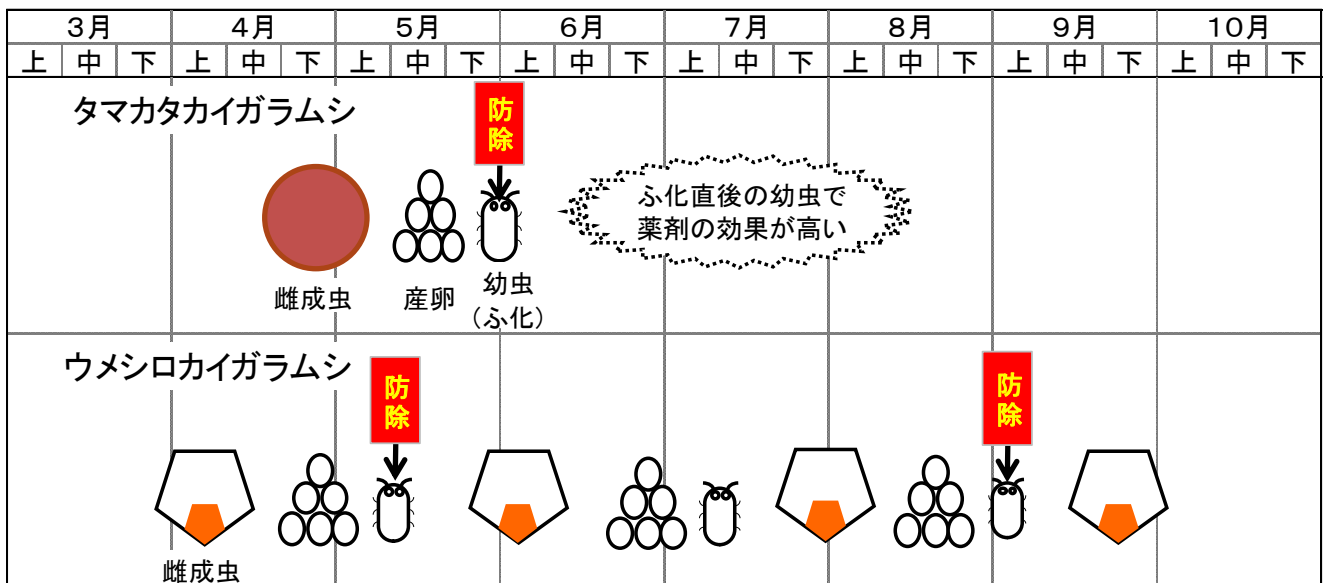
2 ふ化最盛期(5月末頃)に防除

若狭町成出のウメ園におけるタマカタカイガラムシのふ化最盛期は、平成26年は5月30日、平成27年は5月28日、平成28年は5月31日でした(写真2)。また、平成28年は5月15～18日に産卵し、5月24日からふ化が始まっています。

4月下旬～5月上旬にふ化するウメシロカイガラムシよりも約1ヶ月遅いため、本虫に対しては追加の防除が必要です(第1図)。幼虫の発生は年1回だけなので、ふ化した直後の5月末を中心とした時期が1年中でもっとも有効な防除時期です。ふ化した幼虫は6月中旬には枝に定着し、カイガラを形成するため、遅くなると防除効果は低下します。



写真2 タマカタカイガラムシの幼虫（ふ化最盛期）



第1図 タマカタカイガラムシの発生消長

3 ピリフルキナゾン水和剤を散布

現行の防除体系でウメシロカイガラムシを対象としているブプロフェジン水和剤を、収穫前日数を考慮して用いた場合、タマカタカイガラムシに対する効果がみられませんでした。タマカタカイガラムシの防除には、5月末を中心とした時期のピリフルキナゾン水和剤2,000倍液の散布が有効でした(第1表)。薬剤の効果を安定させるためには、5月中旬から幼虫のふ化状況を確認し、ふ化最盛期(幼虫の拡散開始時期)から数日以内にピリフルキナゾン水和剤を散布します。

第1表 薬剤散布後のカイガラ内の幼虫生存数

処理区	希釈倍率	散布日 (月/日)	幼虫数 (頭/カイガラ)	対 無散布比
ブプロフェジン水和剤	1,000倍	5/18	7.9	95
		5/24	8.9	107
ピリフルキナゾン水和剤	2,000倍	5/18	5.0	60
		5/24	2.7	33
		5/31	1.3	16
無散布			8.3	100

調査時期:8月中下旬

4 留意点

タマカタカイガラムシは日陰部を好んで定着しているので、樹の下から吹き上げて薬剤を散布すると効果が安定します。

[その他]

研究課題名：ウメを加害するタマカタカイガラムシ防除技術の確立

研究期間：平成28年度

研究担当者：農試 園研C ウメ・果樹研究G 赤堀巧、中川文雄